松井文庫常設展示室展示解説シート

『八代城大パノラマ』

平成16年8月31日(火)～10月11日(月)

八代城を描いた絵画や絵図を一堂に展示。江戸時代の八代城の姿がよみがえります。

二階櫓眺望之図（にかいやぐらちょうぼうのず）

矢野派　紙本著色　巻子装　縦74.0㎝　長さ707.0㎝　江戸時代後期(19世紀前半)　松井文庫所蔵

この絵は、八代城本丸の西側にある小天守台に建っていた二階櫓からの眺望を描いたもので、南東～南～西～北～北東方向の景色がパノラマ状に描かれています。現在は陸続きとなっている高島などが、まだ海中にあることから、これらの島々が干拓によって陸続きとなった1820年代より以前に描かれたものと思われます。

江戸時代の八代の様子がわかる資料として、たいへん貴重な作品です。

(左上) 永御蔵(現在「洋服の青山」)
(上) 水島、大鼠蔵･小鼠蔵
(左) 浜茶屋(現在の「松浜軒」)　遠くに高島、大島、さらに雲仙が見える。

八代城図

吉井筆　絹本著色　掛幅装　縦71.1㎝　長さ123.0㎝　江戸時代末期～明治時代(19世紀)　松井文庫所蔵

ミュージアム展示解説シート

八代城について

現在、八代市中心部に本丸跡が残る八代城は、松江城とも呼ばれます。この城は、元和５年(1619)当時麦島にあった八代城(麦島城)が地震で崩壊したため、熊本城主加藤忠広が幕府の許可を得て、家老の加藤正方に命じ、元和 6 年(1620)から同8年にかけて松江村に築いた城です。

寛永 9 年(1632)加藤氏の改易により、熊本城主となった細川忠利の父忠興(三斎)が入城し、三斎没後の正保 3 年(1646)家老の長岡（松井）興長を八代城守衛とし、以後明治３年(1870)の廃城まで代々松井氏が在城しました。

400 年近く八代の歴史を見つめてきた城です。

①八代城図（やつしろじょうず）

吉井筆　絹本淡彩　掛幅装　縦 71.1 ㎝×横 123.0 ㎝　江戸時代末期～明治時代（19 世紀）　松井文庫所蔵

本図は、八代城を南西方向から見た図で、本丸を中心に二之丸（現在：市役所や総合病院がある）、三之丸（現在：代陽幼稚園、武道館、福祉センター）、北の丸（現在：松井神社）が描かれています。お城のシンボルである「天守」（最も高い物見櫓）は本丸北西の角にありましたが、寛文 12 年（1672）の落雷で焼失し、その後再建されなかったので、本図でも塀に囲まれた天守台のみが描かれています。天守台の南にある建物が「小天守」で、寛政 12 年（1800）以降は「二階櫓」と呼ばれました。

本図をおさめる紙袋に「吉井筆」とあり、八代の絵師で矢野派（細川藩御用絵師の画派）に学んだ吉井欽助（号暘谷、一瓢、文政2年～明治 20 年・1819～1820、69 歳没）の作品ではないかとみられています。

②二階櫓眺望之図（にかいやぐらちょうぼうのず）

紙本著色　巻子装　縦 74.0 ㎝×横 707.0 ㎝　江戸時代後期（19 世紀前半）　松井文庫所蔵

八代城本丸の二階櫓から見下ろした、南から西、北にかけての眺望をパノラマ状に描いたもので、今から 180 年ほど前の八代の様子がわかります。

本図の左から、本丸南東角にあった宝形櫓（方形矢櫓）、二之丸と三之丸をつなぐ二之門、三之丸と城下をつなぐ大手門の甍が見え、南西から西にかけて、月見櫓（角ノ矢櫓）、米を貯蔵した永御蔵（長蔵＝現在遺構が春光寺に移築保存されている）、三本松門、黒門。北西には、松浜軒（濱茶屋）、北には塀に囲まれた天守台や、城主やその家族が居住した北之丸の建物が見えます。塩焼きの煙がたなびく海浜の様子や、まだ地続きになっていない頃の大島や高島など、すっかり景観が変わってしまったところもありますが、遠くに望む阿蘇や雲仙の山並み、八代海の島々など、今と変わらぬ風景が広がっています。

③八代城郭図（やつしろじょうかくず）　（右図）

紙本著色　巻子装　縦 63.0 ㎝×横 116.7 ㎝　江戸時代後期（19 世紀前半）　松井文庫所蔵

本図は、八代城とその城下町を描いたもので、南を上に、北を下にして描かれています。城の周辺には武家屋敷がおかれ、住んでいる武士の名前が記されています。城下町の出入口など警備のうえで重要な地点には、今でいう管理職クラスの武士が配置されました。

当時の幹線道路である薩摩街道は、城の北東（本図左下）にあるで出町から入り、新町、宮之町、二之町、本町（現在の本町アーケード）、中嶋町を通って球磨川に出るルートでした。球磨川に面した場所には「札の辻」があり、熊本の基点（熊本市新町一丁目札の辻）から十一里（＝約44㎞、一里＝約 4 ㎞）であることを示す目印がありました。部分的に赤く塗られているところは寺や神社で、現在もほとんどの寺社が同じ位置にあります。現在の八代市中心部が古い歴史をもつ街であることがわかります。

④八代城郭図（やつしろじょうかくず）

紙本淡彩　巻子装　縦 65.0 ㎝×横 93.9 ㎝　江戸時代中期（18 世紀前半）　松井文庫所蔵

本丸の北西に面した西の丸部分に「崇法（芳）院殿」という書き込みがあります。崇芳院とは、松井家3代寄之の夫人古宇（1624～1711）のことで、この場所に彼女の住まいがあったことがわかります。松井家4代直之が、母崇芳院のために、元禄元年（1688）に建てたのが浜御茶屋（現在の松浜軒）です。本図は、崇芳院の生没年や武士たちの氏名からみて、宝永年間（1704～1710）頃の八代城下を描いたものとみられています。

本図には、約 330 人の氏名が記されていますが、そのうち 50 人に〇印がついています。彼らは本藩から派遣された武士で、「八代御城附」と呼ばれました。八代城は、正保３年（1646）以来、藩の筆頭家老である松井家が城主として代々守衛にあたりましたが、松井家の家臣だけでは不足する防衛力を補うため、本藩の武士すなわち細川家の家臣が派遣されました。しかし、八代城では松井家の支配下に置かれたため、直臣（直属の家臣）、陪臣（家臣の家臣）という意識の違いから、松井家の家臣と対立することがよくありました。

参考『八代市史近世史料編Ⅰ』「八代町図について」蓑田勝彦（平成元年　八代市教育委員会発行）

⑤道中風景図巻（どうちゅうふうけいずかん）

杉谷雪樵（1827～95）筆　　全 12 巻のうち第１巻　紙本著色　巻子装　縦 33.1 ㎝×横 1752.9 ㎝
江戸時代末期（19 世紀中頃）　松井文庫所蔵

本図巻は、全部で 12 巻あり、八代から江戸日本橋までの道中の風景が 118 図にわたって描かれています。そのうち第１巻の本巻は、八代から小倉までの11場面を描いています。第１図の「八代松原口」は、八代城下町への出入り口である出町を、北西方向から見たもので、奥に見える大きな屋根が彦一塚で有名な光徳寺です。

現代の私たちにも、見覚えのある山並みや島影、聞きなれた地名など、親しみを覚える作品です。

【第1巻に描かれた場所】　①八代松原口　②豊福往還ノ上ヨリ四方ヲ寫　③川尻大渡　④川尻往還より眺望之図　⑤熊本出町口ヨリ眺望之図　⑥松風関之景　⑦筑後新清水　⑧寳満嶽　⑨太宰府社内之図　⑩小倉橋ヨリ眺望之図　⑪小倉沖ヨリ四方眺望之図

③八代城郭図　江戸時代後期